

られたのは第三紀で、次に南方断層を、次に北方断層を生じたが、偶その兩断層が並行した爲、中間に標的地帯を生ずるに至つたもので、是が爲能登の北部は一たび本州との間に海峡を挟んだが、長年月の間に土砂の埋む所となり、再び接続するに至つたのである。

**オウチガハ** 邑知川 ↓イヒノヤマガハ、飯山川。

**オウチゴウ** 邑知郷 羽咋郡の古郷名。和名抄に見えて、於保知と訓ずる。

**オウチゴウ** 邑知郷 藩末以降羽咋郡中を大區分するに用ひられた四郷中の一つで、敷浪附近以北、千路・瀧附近以南、鹿島郡境に至る間の六十四村をいふ。

**オウチシテジユウゴカソン** 邑知七十五ヶ村 能登邑知瀧東南の羽咋郡平野に散在する諸村をいふ。邑知院内の羽咋川以南の村數五十八ヶ村、その越登賀三州志に載する、垣内は十六ヶ村である。更に三州志には平床を押水北庄に加へるが、能登名跡志には邑知院内志雄庄としてあるから、それで總數七十五ヶ村といふのであらう。端郡七十五村といふも之に同じい。

**オウチシヨウ** 邑智庄 羽咋郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目録に、羽咋郡包(邑)智院云々、同庄内云々とあつて、院と庄と並存したことが知られる。又應永廿八年十二月廿九日附信判書に、能登國羽咋郡邑智庄内中山事云々とあるから、その頃邑智庄と稱してゐる所もあつたのであるが、後世では院のみになつた。

**オウチノ** 邑智野 羽咋郡邑知七十五村は古へ荒野で、邑智野とも越路野ともいうたと

傳へる。しかし確實ではない。

**オウチハツケイ** 邑知八景 能登邑知瀧附近の八勝で、眉峰夜雨・寶達暮雪・瀧崎落雁・洞谷晚鐘・石動秋月・寺家晴嵐・唐崎夕照・瀧瀬歸帆である。そのうち瀧崎は鹿島郡、洞谷は同郡永光寺、寺家は羽咋郡一宮村、唐崎は湖邊の鹿島郡の地、瀧瀬は羽咋郡吉崎の地先である。

**オウネン** 黄年 金澤の俳人。古寺町寶來寺の山伏で、福藏院空師といつた。俳諧を甘谷に學び、初め號を一慶・梅守又は柯堂といひ、二夜庵を嗣ぎ、後に十梅園と稱した。嘉永六年六月十日歿、齡七十七。此花集・白根集等はその選集である。黄年の嗣は上田松英である。

**オウノマツミドリノスケ** 阿武松縁之助 鳳至郡七海村の農仁兵衛の子。幼名長吉。初め馬士であつたが、臂力があつたから力士たらんと欲し、文化十二年廿五歳で江戸に上り、武隈文右衛門の門に入り小車と稱した。然るに小車は徒に多食多飲で、闘技頗る疎放であつたから、武隈はその成功の望なしとし、銀一步を興へて歸國せしめた。小車因つて板橋まで歸つたが、又志を勵して上り、鍛山喜平次の弟子となり、小縁と稱し、同年魏町心法寺境内の興行に初めて序ノ口に列した。次いで又小柳長吉と改め、文政二年春幕下二段に上り、五年春淺草藏前八幡の花相撲に、先師武隈と角して勝ち、同年冬幕内に進み、七年小結となり、九年冬大關となつた。翌十年春芝神明の興行に小柳は名を阿武松縁之助と改めたが、力量技巧天下に比なきを以て、十一年終に日下開山横綱免許となり、長州侯毛利

齊廣の抱力士として、粟米五十俵を得た。是を以て相撲番附には長州阿武松縁之助と記される。天保四年の日記に、『當秋淺野川大橋上に而大相撲興行、東關緋緋、西關阿武松』と記されて居るのも是である。後嘉永四年十二月九日六十一歳を以て歿し、深川淨心寺に葬られた。その記念碑には、金澤立像寺に武隈文右衛門・小柳常吉・勇島巖吉・千賀浦庄吉が安政二乙卯歲十月に立てたもの、鹿島郡小島西光寺内に安政六年己未九月建てたもの、珠洲郡正院村に年不詳のものがある。

**オウバイ** 黄梅 ↓ロウアンオウバイ 老菴黃梅。

**オウハクシ** 王伯子 名は國鼎、伯子はその字である。明の進播の臣で我が邦に流寓したものであつたが、慶長中前田利長は之を聘して、城外蓮池園に居らしめ、衣食の資を給して優遊せしめた。凡そ明儒の歸化したる者、尾張の陳元贊は寛永中に在り、水戸の朱舜水は萬治中に在るから、伯子は之に先だち、異邦の儒者の諸侯伯に仕へた第一人者であつた。利長又當時我が邦で重刊した四書に譌誤多きを憂へ、伯子をして之を校正して公にせしめた。前田利常の越中高岡瑞龍寺に寄進した畫鷹の屏風にも、伯子の題した贊辭十六章があつた。その他民間に傳はつた二十四孝の畫讀及び山水を描いた扇面があつて、今は所在を詳かにせぬが、後者には日本慶長六年八月日大明王伯子高加陽旅舎題と記してあつたと傳へられる。

**オウマヤバシ** 御厩橋 金澤上柿木品と下柿木品との間に在つて、倉月用水に架けられる。舊時は橋爪に橋番人が居た。

**オウマヤマチ** 御厩町 金澤の舊町名。一に御馬屋町とも書き、柿木品御厩橋の附近をいうた。藩厩がそこに在つた爲である。又別に厩町といふのもあるが、それは木新保である。

**オウマヤモンゼン** 御厩門前 ↓カナヤモンゼン 金谷門前。

**オウムアンミチノキ** 鸚鵡庵道記 一冊。鸚鵡庵素心尼が、享保十七年卯月十八日金澤を出て、津幡・石動・富山の俳人を尋ね、飛騨路から尾張・伊勢に出で、麥林に會し、紀伊・京都・越前を経、松任で千代に逢ひ、九月十日歸着するまでの道記である。↓ソシン素心。

**オウムノサヘヅリ** 鸚鵡の囀 一冊。遠藤高環著。文化四年秋大乘寺湛堂の序文があり、人の生まれてから死に至るまでの行住座臥・禮儀作法・因果應報の理等を細大漏らさず、自語を挿んで叙した教訓書である。

**オウヨ** 黄譽 金澤淨土宗玄門寺四代の住職。俳書白根草の序文を作る。貞享二年十二月二十一日示寂、法名玄蓮院黄譽上人縁阿巖貞和尚。

**オウレン** 黄蓮 白山産の黄蓮け、世に最上品とせられた。加越能名物志に『ツル黄蓮・ミツバ黄蓮、白山に多し。黄蓮の一種なり。』と見え、和語本草綱目に『和黄蓮は加賀州より出づる者上品なり。他は皆細長く、毛多く、内容にて黄色薄し。不堪用。』とあり、貝原益軒の大和本草にも『黄蓮は常州・加州の産尤佳なり。奥州・會津・藝州にも多し。日本の黄蓮、性よし。故に西土・朝鮮へも多く渡る。唐山の書にも、倭黄蓮を良とす。』と見える。延喜典藥寮式に『加賀國七種。黄蓮七斤云